

ステュアート、スミス、マルサスと《需要定義問題》

中澤信彦(関西大学)

はじめに

もともと本報告は昨年度大会フォーラム「イギリスにおける経済学方法論の展開」における只腰親和報告「イギリス経済学の方法論成立期における演繹的方法の意味」を補完し発展させる目的で準備された。只腰報告が明らかにしたように、1830-40年代は経済学が学として自立しつつある時期にあたり、演繹的方法の要諦としての基本用語の定義の必要性が強く主張された。経済学が真に実証的な科学であるためには、命題の真偽が明確に判別されなければならないし、その場合の前提として、「A は B である」とか「A は C でない」といった命題の中に出てくる諸概念(A、B、C)が、学術用語として明確に定義されていなければならない。とりわけ「需要」という用語の多義性は 1810-20 年代にすでに経済学者たちの論争対象になっていた。この需要概念の多義性をめぐる問題——本報告ではこれを《需要定義問題》と名づける——は、『国富論』の「有効需要」概念の正しい理解をめぐる論争を誘発してもいた(1811 年 10 月 15 日ミルからリカードウへの手紙、1814 年 10 月 9 日マルサスからリカードウへの手紙など)。

本報告の目的は大きく二つある。第一に、『国富論』の自然価格論と《需要定義問題》との関係に着目することによって、経済学方法論史上『国富論』が果たしたと思われる役割の一側面を描き出すことである。第二に、マルサスが『国富論』をどう読んだのか——とりわけ『国富論』の有効需要概念をどのように継承し改変したのか——に着目することによって、マルサス経済学の形成過程と方法論的特質の一端を照らし出すことである。考察に際して、スミスに先駆けて「有効需要」という用語を初めて自覚的に使用したジェイムズ・ステュアートの存在を無視することはできないので、ステュアートと《需要定義問題》との関係にも十分な目配りを行いたい。

結論を先取りするならば、マルサスはスミスの有効需要概念の批判的継承を通じて《需要定義問題》を提起するに至ったのであり、『国富論』の方法論上の不備——有効需要概念の一面性——の修正を通じて彼独自の一般的供給過剰の理論を彫琢していったのである。

I スミスの自然価格論(1)——狭義の自然価格論——

II スミスの自然価格論(2)——広義の自然価格論——

『国富論』において有効需要の概念は自然価格論の一部として展開されているので、

後者の十分な検討なしに前者を正確に理解することは不可能である。第Ⅰ・Ⅱ節がこの予備的作業に充てられる。考察によって得られた結論は以下である。(1)スミスにとって有効需要とは自然価格を支払う意志のある需要者の需要量を意味する。(2)スミスの主要な関心は市場価格が自然価格に長期的には必ず引き寄せられるという論理の構築にあり、一時的な価格としての市場価格の決定メカニズムは彼の関心の外にあった。

Ⅲ 需要定義問題(1)——スミスによるステュアート黙殺——

ステュアートは経済学史上初めて「有効需要」という用語を使用し、「等価物である貨幣を伴う需要」としてそれを定義した。彼は需要という用語に関して「言語の貧困のため、用語は、それが使われるはずの状況に応じて異なった意味に受け取られることがあるので、その曖昧さを避ける意味で」(『経済の原理』)この用語の分析が必要だと考えた。

ステュアートは、財貨の価格の上昇を買い手の間での競争の発生の結果として把握し、この状態を「需要が高い」と表現する。同様に、価格の低下を売り手の間での競争の発生の結果として考え、この状態を「需要が低い」と表現する。それぞれは「需要の急激な増大(あるいは減少)」とも呼ばれる。需要の増大(減少)が急激に発生した場合、供給サイドはすぐに反応できないため、財貨の価格の上昇(低下)が生じるからである。ところが、需要が規則的・漸次的に増大(減少)する場合、それに反応して供給も規則的・漸次的に増大(減少)するから、結果的に価格は変化しない。この状態を彼は「需要が大きい(小さい)」と表現する。彼は、大きな販売量を帰結する「大きい」需要と高い価格を帰結する「高い」需要とを区別することによって、多義的で曖昧な需要という用語に対して一定の整理を試みた。つまり、ステュアートは、マルサスたちよりも半世紀もはやく、『需要定義問題』を指摘・提起していた。マルサスがコミットした19世紀の『需要定義問題』は、18世紀にその前史を持っていたわけである。

ところが、『原理』を通じてこの問題の存在を知っていたはずのスミスは、有効需要という用語にステュアートとは異なる独自の意味内容を込めることによって、彼の問題提起を黙殺し退けた。それは戦略的かつ必然的な黙殺であったように思われる。スミスの主要な関心は市場価格が自然価格に長期的には必ず引き寄せられるという論理の構築にあり、一時的な価格としての市場価格の決定メカニズムは彼の関心の外にあった以上、ステュアートが重視した需要の「高低」に関する議論は、スミスの目に瑣末的あるいは非本質的なものとしてしか映らなかったはずである。スミスは需要の「大小」のみを問題にした。その結果、有効需要は明確に数量タームで定義され、同じく数量タームで定義された供給と同次元での比較が可能となった。市場価格が自然価格にたえず引き寄せられる傾向を持つという論理の構築が容易になった。『国富論』の商業的成功は、ステュアートが先駆的に提起しようとした『需要定義問題』を経済学

の表舞台からいったん消去してしまったけれども、それはスミス自然価格論の論理と方法とが必然的に要請するところであった。

IV 需要定義問題(2)——マルサスによる復活——

ステュアートが着目したにもかかわらずスミスによっていったん切り捨てられた需要の「高低」への関心は、意外なことに、スミスの忠実な後継者たらんとしたマルサスによって復活させられた。『食料高価論』(1800)は、救貧法批判という論点をデビュー作である『人口論』初版(1798)と共有しながらも、スミス自身が決して主題に据えなかった短期的な市場価格の決定メカニズムについて、詳細な分析を加えている。ある商品に対して 50 人の需要者がおり、各々の需要者はこの財貨に支出できる貨幣額が異なっている場合、商品が 40 人分しか供給されなければ、市場価格は需要者のうち 10 人が排除される価格まで上昇する。すなわち、上位から 40 番目にあたる購買者がこの商品のために犠牲にしている貨幣額が、その市場価格となる。現代の経済学の用語で言えば、マルサスは限界購買力による価格決定について論じている。このような価格理論にもとづく彼の診断は、救貧法による所得補助(所得移転)が限界購買者の購買力を人為的に引き上げてしまったために、イギリスの食料価格はスウェーデンよりもはるかに高騰してしまった、というものであった。

供給が需要に不足するという限定された状況においてはああるが、マルサスは供給と比較した需要によって市場価格が決定されるという結論にたどりついた。この場合の「需要」の意味は、スミスのそれとは異なり、その商品を獲得するために払ってもいいと考える犠牲の大きさを意味する。もっとも、マルサスは『食料高価論』段階では両者を明確に区別するには至っていない。しかし、1810 年代になるとマルサスは需要という用語の曖昧さの問題性を次第に意識するようになる。そして、晩年の『経済学原理』(1820、1836)および『経済学における諸定義』(1827)では彼自身の見解が明確に定式化されるに至る。すなわち、需要には「二つの異なった意味があり、一つは需要の程度(extent)、すなわち購買される諸商品の数量に関するものであり、もう一つはその強度(intensity)、すなわち需要者たちがその欲望を満たすために払うことができ、また払ってもいいと考える犠牲に関するものである」(『諸定義』)と。

すでに見たように、ステュアートは需要の「大小」と「高低」を区別することによって需要概念の多義性という問題に対して一定の整理を試みたが、マルサスもまた需要の「程度」と「強度」を区別することによって同様の整理を試みた。この明白な並行関係から、マルサスがステュアートの影響に浸透されていたと推察することは許されるところかもしれないが、そう断定するに十分な文献的証拠を我々が欠いていることも事実である。他方、マルサスがスミスの有効需要概念と対峙し続けたことについては、そう断定するに十分な文献的証拠がそろっている。したがって、マルサスの需

要への強い関心はスミスの有効需要概念の批判的継承を通じて育まれてゆき、それがやがて彼独自の理論である一般的供給過剰の理論を生み出すに至った、と理解するほうが妥当である。それでは、マルサスはスミスの有効需要概念をどのように継承・改変することによって一般的供給過剰の理論へとたどり着いたのか？

V 需要の定義から一般的供給過剰の理論へ——マルサス経済学の成立——

スミスは有効需要を「程度に関しての需要」としてしか定義せず、その結果として市場価格を決定する「強度に関しての需要」概念を等閑に付してしまった。そのことにマルサスは不満を抱いていたようで、『経済学原理』で次のように述べている。

さて、需要者の一部が示している、自分の欲求を満たすために以前よりも大きな犠牲を払おうとするこの意思こそ、私がより大きな需要の強度と呼んできたものである。一定数の購買者の心中にこの種の需要を刺激するような性質を商品が持たない限り、いかなる価格の騰貴も起こりえないし、また、需要と供給が価格を決定すると我々が言う場合には、常にこの種の需要が意味されていなければならないから、私はそれに名前を与えなければならないと考えたのである。それは有効需要とは本質的には異なる。有効需要とは、アダム・スミスの定義によれば、自然価格を支払う意思と能力を持つ者によって欲求される数量である。そして、至極当然のことながら、この需要は自然価格が最低の時に最大であるだろう。しかし、需要の強度の増大は、それが現実に喚起される時、供給された商品の数量と比較して、提供された価値の増大を一様に意味する。・・・商品の価格は需要に正比例し供給に反比例して変動すると正確に言われる場合には、需要とは常にもっぱら有効需要ではなく需要の強度のことを意味している。（『経済学原理』）

マルサスがスミスの有効需要の考え方に精通していたことは間違いないが、彼はスミスを再述するにとどまらなかった。彼はスミス自身が決して主張しなかった有効需要の強度という考え方へ歩みを進めている。有効需要は「強度」あるいは「(需要者の)犠牲」の観点からも検討される必要がある、と彼は主張する。なぜなら、需要の強度いかんで市場価格は生産費(自然利潤を含む)以上にも以下にもなりうるが、市場価格が生産費すら満たさないほどに低い場合、いかに巨大な可能的生産力が存在しようとも、資本家の資本蓄積への動機が失われ、生産力が有効に発揮される可能性がきわめて低くなるからである。生産費を十分に償うほどの高い市場価格がもたらされて、初めて生産力は有効に発揮されるはずであるから、「強度」「犠牲」という観点を抜きに生産力を有効に発揮させる需要を考えることはできない。一商品の継続的供給を有効なものとするために、需要者たちが払わねばならぬ犠牲は、市場において、支払われる賃

幣量で表現される。貨幣の価値が不変であるならば、有効需要の強度を貨幣によって表現しても問題は生じないが、貨幣の価値が不変であると一般に想定することはできないから、貨幣以外の何かが、貨幣の価値が変化する場合にも有効需要の強度を測ることができる尺度として求められねばならない。最終的にマルサスは支配労働をその尺度として選んだ。支配労働とは、ある商品を市場において販売して得た貨幣で雇用しうる労働量である。そして、支配労働で測定された商品の価値の大小によって、次期の生産量および雇用量の大小が決定される、と彼は考えている。

一般的富は、その特定部分と同様に、常に有効需要に従うものである。商品に対して大きな需要がある時には常に、換言すれば、[その商品]全量の生産に際して、より大きな価値の資本をまったく必要としないのに、以前よりも大きな分量の標準労働を支配する時には常に、商品の一般的増大を期待すべき理由があり、これは特定商品の市場価格がその貨幣生産費の比例的騰貴を伴わずに騰貴する時にその商品の増大を期待する理由と同一種類の理由である。そして、逆に、支配労働で測定された一国の生産物の価値が下落するのに、同一価値の前払いが継続する時には常に、労働者を働かせようとする[資本家・商品生産者の]能力と意思は減退するであろうし、生産の増大は一時的に妨げられなければならない。（『経済学原理』）

ここでの「資本」が商品の生産のために雇用される労働への「前払い」を意味していることに注意しよう。有効需要の強度の増大(減少)は、財貨の価格の上昇(低下)を引き起こすが、それは需要者たちがその欲望をみたすために払うことができ、また払ってもいいと考える犠牲[=支配労働]の増大(減少)を意味する。それを商品の供給者の側から見れば、商品の販売によって購買できる労働量[=免除できる労苦の量]の増大(減少)を意味する。つまり、それが実質賃金率の低下(上昇)、利潤の増大(減少)を意味するので、それが刺激となって次期の生産の拡大(縮小)を促し、雇用の増大(減少)として帰結するのである。有効需要の(強度の)減少による雇用の減少[=失業の発生]こそ、マルサスが「供給過剰」という言葉によって意味しているものであるが、それは部分的ではなく一般的に起こりうる。その理由を彼は次のように説明する。

仮定された場合[=資本家・地主がにわかに大いに節儉的となり、一国の生産物のうちの普通よりはるかに大きな部分がただちに生産的労働の維持に振り向けられた場合]では、明らかに以前には個人的奉仕に従事していた者が、資本の蓄積によって、生産的労働者に転換せられたために、異常の分量の種類の商品が市場にあるであろう。しかも、労働者の数は全体として同一であり、そして地主および資本家の間における消費のために購買しようとする能力および意思は仮定によって減少しているから、商品の価値が労働に比較して必然的に下落し、ひいては利潤をきわめて著しく低め、し

ばらくの間、更なる生産を妨げるだろう。しかし、これこそがまさに供給過剰という語の意味するところであり、しかもこの場合それは明らかに一般的であって部分的でない。(『経済学原理』)

「商品の価値が労働に比較して・・・下落」するとは、有効需要の強度の減少に他ならない。「強度に関しての有効需要」概念は、一般的供給過剰の発生の論理の因果系列の出発点に位置している。マルサスにとって「有効需要」概念の再定義は、一般的供給過剰の発生の論理を構築する上で、不可欠の作業であった。したがって、『需要定義問題』へのコミットこそが彼をして独自の経済学体系を醸成せしめた、と言っても過言でないだろう。

以上のような基本構造を有するマルサスの経済理論の方法論的特質を、リカードウのそれとの対抗関係に引きずられるあまり、「帰納的」「経験的」「歴史的」「直感的」といった形容詞で修飾することは妥当でないように思われる。マルサスは基本的概念を厳密に定義し、論理的推論を積み重ねている。両者の差異は、リカードウが攪乱要因を極限まで排した顕著な場合を想定して、経済現象間の因果関係を経済学の原理として解明しようとしたのに対して、マルサスは論理的推論を積み重ねて目の前にある現実(1790年代の食料価格高騰、ナポレオン戦争後の不況など)を説明しようとしたことにある。『経済学原理』の副題である「その実際の適用の目的を考慮して」は、そのような意味で理解されるべきである。

むすび

マルサスは、『国富論』との飽くなき対話を通じて、彼独自の経済学体系を醸成させていった。その対話の第一の目的は、『国富論』を読まれずに尊敬される「古典」としてではなく現役の経済分析書として活かし続けるために、そこに実際的精神を注入することであった。マルサスは、実際の適用への強烈な関心ゆえに、『国富論』の有効需要概念の一面性——「強度」概念の欠如——を問題視し、基本用語の定義という演繹的方法の基礎作業に傾注するに至った。こうしたマルサスの知的営為は、スミスの側から見れば、「主」ではない「従」の議論に焦点をしばるものであっただろう。それをマルサスのスミス読解のねじれと否定的に評することもできるかもしれない。しかし、そのねじれが、期せずして、『国富論』の成功によって一度は経済学の表舞台から消去されてしまったかに見えた『需要定義問題』を復活させた。このように経済学方法論の発展過程は決して一直線でない。『需要定義問題』をめぐる経済学者群像は、この平凡だが重要な事実を我々に教えてくれる。

※当日フルペーパー(参考文献一覧を含む)を配布します。